

1957年諫早大水害から60年-教訓と災害伝承-

長崎大学大学院工学研究科 フェロー会員○高橋和雄

1. まえがき

昭和32年7月24日～27日大雨(梅雨前線)」によって長崎県諫早市とその周辺の市および郡が被害を受けた。特に、諫早市は25日の豪雨で本明川が氾濫し、甚大な被害を受けたことから、この大雨を「諫早豪雨」、災害を「諫早大水害」と呼んでいる。旧諫早市内では、死者494人、行方不明者45人の人的被害を受けた。2017年に諫早大水害から60周年を迎え、諫早市では「防災・減災フォーラム2017in諫早」が開催された。諫早大水害の体験を語り継ぐとともに、2017年九州北部豪雨災害を踏まえた地域防災のあり方が議論された。本稿は60周年フォーラムを契機に取りまとめたものである。ここでは諫早大水害の降雨の特徴、先進的な復興対策を述べるとともに、災害体験の継承を紹介する。

2. 降雨の特徴

「長崎海洋気象台100年のあゆみ」¹⁾に記載された雨量分布図によれば、この大雨はきわめて局地性が強く、大村・諫早・島原・熊本を結ぶ円弧上の幅約20km、長さ約100kmの細長い帯状の地域に集中していた。この大雨の中心部である雲仙岳北斜面の西郷では、1昼夜に1,109.2mmの記録的な雨量を観測したが、この地点から約20kmの距離にある雲仙岳南斜面の口之津では、わずか86mmで、約1,000mmもの差がある。また、多雨域が沿岸部にあり、山岳方面の雨量が少ないこともこの大雨の特徴の一つであった。この当時は、まだ「集中豪雨」の用語は用いられていなかったが、諫早豪雨こそ「集中豪雨」の典型といえる。

3. 先進的な復興対策

災害当時の諫早市長が内務官僚出身で官選岐阜県知事の経験があった野村儀平氏(長崎県出身、諫早市名誉市民)であったことから、地方都市の災害にもかかわらず、地域の課題を国の機関等に要望して、各種の支援を得て復興事業においては当時としては斬新な対策が導入された。「諫早大水害20周年復興記念誌」²⁾によれば、市長は次の復興の基本方針のもとに復興事業の推進に当たった。①災害を繰り返さないような恒久対策の実行、②従来の原形復旧方針を改良復旧方針への転換、③被災の中小企業・農業の再建についての特別援助、④復興工事の早期完成、⑤この機会を捉えた都市の近代化、⑥市財政に対する特別援助等。

この復興の基本方針のもとに、次のような施策が達成された。

①改良復興方針への転換

②本明川の根本的改修 国の直轄河川(現在の一級河川)に編入され、抜本的な大改修が行われた。

③中央市街地の都市改造 本明川の拡幅、橋梁の架替および堤防のかさ上げに伴って都市の改造が必要になり、土地区画整理事業が長崎県によって施行された。河川改修と土地区画整理事業の合併施行となったことから、用地交渉は一元化された。

④諫早眼鏡橋の移設保存 流失を免れた諫早眼鏡橋は本明川の拡幅に伴い、爆破して護岸の栗石に使用することが決まっていたが、市長を始めとする関係者の尽力で、文化庁は眼鏡橋を国の重要文化財に指定した。眼鏡橋は解体され、諫早公園内に復元された。

⑤被災中小企業再建に対する特別援助 諫早地区中小企業災害融資に関する特別措置が閣議決定され、公庫融資の特別措置と異例の利子低減が諫早大水害に限り適用された。

その他、被災農地の復旧と農地の区画整備事業の並行施行、中央市街地の内水排除事業、市財政に関する異例破格の支援、市庁舎の新築、健康保険諫早総合病院の誘致、上山緑地公園の設置等。

なお、本明川の改修の計画高水流量は、年確率を80年として決定された。この流量は諫早大水害の100年確率に相当する実績流量と比較すればかなり下回るものであった。

4. 復興事業終了後の動き

1982年7月23日の長崎豪雨災害時に諫早市でも時間雨量120mm、日雨量 483mmを観測した。本明川は越水し越水寸前の危険な状態となったことから、国土交通省は100年確率に相当する諫早大水害に対応できるようにするため、本明川ダム事業に着手している。地域住民の取組みとしては、1995年に「本明川オピニオン懇談会」が始まり、1997年河川法の改正に伴い、本明川でも河川環境に配慮した対策が進められ、市民参加の川づくりが開始された。2009年には「本明川を語る会」が諫早大水害を語り継ぎ、命の尊さや防災の大切さ等を知ってもらうことを目的に設立された。

5. 被災地の災害伝承

諫早市は復興事業が概成した 1963 年 3 月に「諫早水害誌」³⁾を刊行した。本書の内容は、7.25 水害における被災状況、復旧復興事業、復興への道に加えて、諫早大水害の自然科学的並びに人文科学的究明から構成されている。諫早市は、20 周年に当たる 1977 年 7 月に「諫早大水害 20 周年復興記念誌」²⁾を刊行した。また、50 周年にあたる 2007 年に諫早市は記念誌「あの日を忘れない」⁴⁾を刊行した。さらに、半世紀のターニングポイントとして、「防災・減災フォーラム 2007in 諫早」が実施されたほか、諫早市内では諫早市や自治会主催の慰霊祭・追悼法要が開かれた。記念行事等は 50 周年で一応の区切りと現地は考えたようであるが、災害伝承の取組みは継続され、2017 年に「～諫早大水害から 60 年、地域防災の新たなステージへ～本明川防災・減災フォーラム」が開催された。諫早大水害の記念碑、慰霊碑および水位標等が表-1 に示すように設置されている。その内訳は慰霊碑 3、記念碑 4、水位標 4 の計 11 ヶ所となっている。また、これらのうちの 9 ヶ所は本明川中流域の諫早駅前の永昌東町、城見町、高城町および諫早橋近くの八坂町に集中している。

表-1 1957 年諫早大水害の記念碑、慰霊碑および水位標

区 分	名 称	設置年	設 置 者	設 置 場 所
記念碑	水害復興記念碑	1977	諫早市	富川町、大雄寺参道入口
記念碑	水害復興記念碑	1965	本明町土地区画整理組合	本明町公民館
記念碑	水害復興記念碑	1965		永昌東町、駅前公園
水位標	諫早大水害洪水水位標	2007	長崎河川国道事務所	永昌東町、駅前公園
水位標	32.7.25			城見町、慶願寺の岩肌
慰霊碑	水害殉難者納骨供養塔	1987	諫早市連合婦人会	城見町、慶願寺境内
水位標	本明川洪水痕跡標	1970		高城町、公園
記念碑	諫早大水害復興記念碑	1977	諫早市	高城町、高城公園
慰霊像	殉難者慰霊大悲観世音像	1962	諫早市	高城町、高城公園
水位標	諫早大水害洪水水位標	2007	諫早市	八坂町、諫早シティホテル前
慰霊碑	水難者慰霊碑	1967	旧森山村	森山町、田尻名

6. まとめ

本明川の中流域では、水害 50 年後に洪水時の水位標が設置されている。水害の様子を伝える有効な方法の一つであると評価される。1982 年長崎豪雨災害の被災地等で今後設置することが望まれる。

参考文献

1) 長崎海洋気象台：長崎海洋気象台100年のあゆみ，pp.197-201，1978，2) 諫早市：諫早大水害20周年復興記念誌，全144頁，1977，3) 諫早市教育委員会：諫早水害誌，全864頁，1963，4) 諫早市：あの日を忘れない，全20頁，2007.